

聖書 の 人々

BIBLE CHARACTERS BY D.L.MOODY

ダニエル

エノク

ロト

ヤコブ

バプテスマのヨハネ

D・L・ムーデー著



—— 聖書の人物考 ——

聖書の人々

—聖書の人物考—

D. L. ムーデー著

伝道出版社 発行

BIBLE CHARACTERS

A study of some men of the Bible

by

D. L. Moody

The Moody Press
Chicago

Publisher

THE EVANGELICAL PUBLISHING DEPOT

Tokyo

目次

序言	5
預言者ダニエル	7
一 バビロンに捕らわれて行った人々	7
二 「あなたはあの金の頭です！」	16
三 ネブカデネザルの像	23
四 ネブカデネザルの第二の夢	37
五 壁に文字を書く手	44
六 ダリヨスの禁令	53
七 ライオンの穴	65
エノク	77
ロト	95
ヤコブ	114
バプテスマのヨハネ	136

序言

聖書に登場する男女の人々を研究することは、実に興味深い事柄の一つである。神がそれぞれ時代に、さまざまな環境にある人々をつねに知恵と愛と力をもって扱われるのを拝し、私の心は驚きと賛美にあふれるのである。

本書において、聖書中の人物の素描を二、三紹介することによって、ほかの人々についても同じように研究され、私に与えられたと同じ教訓と喜びとを得られるよう望んでやまない。

D・L・ムーデー

預言者ダニエル

一 バビロンに捕らわれて行った人々

「ダニエルは、王の食べるごちそうや王の飲むぶどう酒で身を汚すまいと心に定め、身を汚さないようにさせてくれ、と宦官の長に願った」（ダニエル一・8）。

「預言者ダニエル」の生涯を学ぶのは、私にとって楽しいことである。ダニエルという名は、「神が私の審判者である」という意味である。彼の同胞たちではなく、神が自分の審判者なのである。ゆえにダニエルは、神に対して責任があると思っていた。ここで、ダニエルとはどのような人物なのかと尋ねる人に説明しよう。

キリストの時代から六百年ほど前、ユダの王たちの罪がはなはだしいので、神の裁きが、王たちと民らにくだされたのである。エホアハズに替わってエホヤキムが王となり、エホヤキムに替わってエホヤキンが王となり、エホヤキンに替わってエホヤキンが王となり、エホヤキンに替わってゼデキヤが王となっ

たが、どの王たちも同じように「主の目の前に悪を行った」としるされている（Ⅱ歴代誌三六章）。

このために、エホヤキムの時代、すなわちキリストの時代から六百年前、バビロンの王ネブカデネザルが神の許しにより、エルサレムに上り、これを囲み、攻略してしまった。ダニエルが若い王子たちとともに捕らわれて行ったのは、おそらくこの頃であったであろう。数年後のエホヤキンが王のとき、再びネブカデネザルは、エルサレムを攻撃し、このときも数千のユダヤ人を捕らえ、神殿の器物を運び去って行った。

さらにまた、ゼデキヤが王のとき、ネブカデネザルは三度目の攻撃をしかけ、エルサレムの都を火で焼き、城壁を破壊し、多くの民を虐殺した。このときもまた一群の民をユーフラテス川の岸边に連れ去ったと思われる。

エホヤキムの頃に、バビロンに捕らわれて行った人々の中に四人の若者がいた。彼らは、後世のテモテと同じように、神に従った敬虔な母親たちから主の律法を教えられていたことであろう。あるいは、神がユダの民に遣わされた「涙の預言者」エレミヤの言葉に感動していたかもしれない。ユダの人々が、イスラエルの神、アブラハムの神、イサクの神、モーセの神を退けて、自分勝手にふるまっていたとき、彼らはイスラエルの神を神として心に受け入れていたのである。

エレミヤが民の罪に対して警告の声を上げたとき、多くの人々は嘲笑して受け入れなかった。エレミヤの涙を笑い——あたかも現代の人々がまじめな説教者に向かってするよう——エレミヤを、余計なさわぎを引き起こす人間だと非難したことであろう。しかし、この四人の若者は、預言者の声に耳を傾け、神のために出て行くだけの強い信仰を持っていた。

さて、彼らは今バビロンにいる。ネブカデネザル王は、ユダヤ人の捕虜の中でも最も前途有望とされる青年数人を選び出し、彼らにカルデア語を学ばせ、バビロンの学問を習得させたのである。そのうえ、王は彼らに自分の食卓から食物を与え、王の飲み物である酒を彼らに飲ませたのである。そして三年後には、当時の全世界の主権者である大王に仕えさせる計画であった。このようにして選ばれた青年たちの中に、ダニエルと三人の友人たちがいたのである。

片田舎から都会——首都といってもよい——に出て行く若者のすべてが、まず都会の門前で大きな罪の誘惑に出合うものである。ダニエルと三人の若者たちも、まさにこの時が、彼らの生涯における危機であった。人はだれでも人生の勝利と敗北の要因を、スタートの時に選択するようである。人生に見られる失敗の多くの原因は、スタートをあやまる点にあるからである。

ダニエルは、正しいスタートを切ることができた。彼は自分の大切なもの失うことなく、バビロンにまで持って行った。それは彼の父母の信じていた信仰であった。彼は聖書の神を信じて恥じることがなかったのである。彼はバビロンの異教の偶像礼拝者の間にあって、自分の光を輝かすことをいとわなかった。捕らわれてきた若いヘブル人は、バビロンの城門を入ったとき、神を味方として身がまえ、神の守りを祈り求めたにちがいない。彼にとって神に切に祈り求める必要は大いにあった。なぜなら、後述のような重大な難事に直面しなければならなかったからである。

試みの時はすぐに来た。彼らに王の食卓のものを食べるようにとの勅令が出された。その食物の中には、モーセの律法で「汚れたもの」と宣告されている獣や鳥や魚の肉があったのはたしかである。あるいは「あなたがたは、どんな肉にせよ、すべてその血を食べてはならない」という規定に反して、調理上十分に血をしぼり出していないものがあったかもしれない。あるいはまた、食物のうちの一部をアッシリヤの神や、バビロンの神に供え物としてささげたものかもしれないのである。このような事柄の一つを考えても、ダニエルがその行動を決定するには長い時間を要しなかったであろうと思われる。「ダニエルは、王の食べるごちそうで身を汚すまいと心に——心に、であることに注意——定めた」。

現代のクリスチャンのだけれど、ダニエルに忠告するとしたらこう言うであろう。「王

の食物を退けることはパリサイ主義の行動である。あなたが自分の立場を守って、それを食べないと言うなら、それは自分を他の人々より優れているとすることになる」。このような説得を、今日ときどき耳にする。この世の人は「郷に入りては郷に従え」と言い、このような人々なら、この若い気の毒な捕虜を言い伏せることができたかもしれない。しかしその結果、この若者は自国においては神の戒めを守ることができたとしても、他国バビロンにおいては守り切れることはできないであろう。自分の信じる宗教を捕らわれる国まで持って行く勇氣など失ってしまったに違いないから。私は周囲の人々がダニエルにこのように言ったのではないかと想像する。「若者よ。あなたは潔癖すぎるのだ。そんなに気むずかしく考えなくてもよい。あまり宗教にこだわる必要はないではないか。今はエルサレムにいないのではなく、バビロンにいるのだから、あなたの友人や親族に囲まれているわけでもない。それにエルサレムの王子でも、ユダの王家の人々の中にもいないのだ。あなたは高い地位から引き落とされてしまって、今は捕虜の身であるのだから、もし王が自分の与える食物を拒み、飲み物を拒んだと知れば、たちまちあなたの頭は打ち落とされてしまうであろう。少しは如才なく行動した方が得だよ」と。

しかし、若者は信仰と宗教を心の中に深くしまっていた。心の奥深い場所こそ、宗教の正しい在り場所であり、宗教の育つ所である。この宗教が力を与え、生活を規制するので